

研究井戸端トーク # 1 COVID-19 で考えた：「研究」ってなんだろう 開催報告

<日時> 2020年12月11日(金) 16:30~17:30

<場所> Zoomにてオンライン開催

<参加者> 延べ30名(大学教職員、大学院生)

<プログラム>

話題提供者からの短い話題提供後、自由な対話

司会：馬場卓也 教授(国際協力、数学教育)

話題提供者：

[金鍾成 助教](#) (教育学、社会科教育)

[有松唯准 教授](#) (考古学、古代オリエント/中近東)

[丸山史人 教授](#) (環境遺伝生態学)

研究井戸端 トーク

初回でしたが、話題提供者の皆さんの興味深い話題提供や司会役の先生の名司会で、好奇心が刺激される楽しい会となりました。



司会役と話題提供者は距離をとりながら会場で参加

<話題提供>

- 金先生は、小学校教員の経験もあり、国ごとの違う「語り」の違いや社会科教育に興味を持ち、「他者の語りにかかれた市民の育成」を研究テーマとしているそうです。韓国や米国と日本の生徒・学生をつなげて、各国の教科書の記載内容を題材にして〈平和〉について話し合う取組みについてご紹介いただきました。また、COVID-19を受けて、大人だけでなく子供を対象としたインタビュー調査をオンラインに切り替える中で感じた困難などについても共有していただきました。
- 有松先生は、日本の考古学では珍しく、西アジア(中近東)を扱うそうです。フィールドワークが困難な状況の考古学ですが、「あれもできないこれもできない」と研究を縮小するだけではなく、COVID-19禍だからこそ、人文学や考古学は何ができるのかという基本的な問い、学問の本質に迫り試行錯誤する良い機会となっているそうです。5年後の自分の研究、さらには10年後の考古学や人文学に思いを巡らせ、学術標本についての構想や国内外の研究者との学際的なプロジェクトなど、これを機に開拓を進めていることに関し刺激的な話題提供をいただきました。

- 丸山先生は、今年設立した「未来共生建造環境センター」の様々な取組みについてご紹介くださいました。COVID-19を受けて、研究として国外からグローバル、学際、産学連携へ、そして場所もフィールド（外）からオンサイト、リモート、スマート（建物内）へと重点を移しているそうです。遠くに行けないので、地元から一緒にやっけていける体制を意識しているそうです。新センターでは、古民家の土壁や茅葺とそこの微生物や人の生活様式に着目し、病原性微生物と関連アレルギー疾患から守られる街づくりに取り組みたいとのことでした。

<トークのハイライト>

- 今回の話題提供者で重なり合うキーワードの一つは、「共生」かもしれません。人類の歴史の中でいずれの文明も長く続かなかつたけれども在地の知が継続していることを想うと、変化の激しい時だからこそ一度立ち止まって考えることの必要性を考えさせられるようなトークでした。
- 今回の話題提供者の皆様から活発な活動を紹介いただきましたが、普段から研究者のネットワークで活発に活動し、大学などにある色々な仕組みを活用しているとのことでした。
- COVID-19でオンラインのやり取りが増えていますが、人間関係が既にできている間柄でのオンラインでのやり取りは問題ないが、そうでない場合はやはり難しい面もあるとの声もありました。
- COVID-19で国内外での移動や対面調査などに制約がある一方、今だからこそできる取り組みや、将来に向けたビジョンの話題で盛り上がりました。新たな研究テーマの設定が必要であるとともに、新たな研究が発見されるチャンスとの指摘もありました。肯定的な変化や方法を能動的に探し、このような時期だからこそ先生方が新しい形で着々と研究や協働を活発に進めているお話は、とても刺激的でした。



終了後の立ち話も盛り上がりました

司会の馬場先生から：3人の話題提供者の話は大変興味深かったです。話題提供者やURAの方々の協力を得て楽しい第一回となりました。このような好奇心を刺激する試みが今後とも続くことを祈念しています。

文責：広島大学 学術・社会連携室 URA 部門（福本）